

「現地を訪問して想うこと」

岡田裕史

2014年 卒業

法学部

参加コース：B 宮城県コース

今回、私は初めて震災の現場へと足を踏み入れた。おびただしい数の仮設住宅やショベルカーを見て、あの日、テレビ越しに見た光景はやはり現実のことだったのだと、ようやく実感できた気がする。あの大地震と津波は、確かにこの地にあったことなのだ。

実際に震災を体験した方々の話を聞いた。あの津波が町を襲った日、ある方は病院の中に三日間ほど閉じ込められたそうだ。一階は既に浸水しており、ただヘリコプターによる救助を待つほかない状況。床から伝わってくる冷気に身を震わせながら、ただただ必死に耐える日々。後に思い返しても、あれほど長く感じた三日間は自分の人生の中で他になかったという。

だが、その水と冷気の地獄に耐え抜いた後、その方が目の当たりにしたのは更なる絶望だったそうだ。津波によって変わり果ててしまった町の光景。およそ800億円以上の経済を動かしていた工場施設が、自分たちが生活を営んできた馴染みの光景が、何もかも流されてなくなってしまっていた。ただの瓦礫の山となってしまった、自分たちの故郷。それでも、津波から生き延びた自分たちは、そこで生き続けなければならなかったという。

およそ同じ国で暮らしているとは思えない、凄惨な体験談だった。本当に、この方々は一瞬でも気を抜けば命を奪われる場面に遭遇して、今を生きているのだと、そう思った。そして、私は改めて、被災した方々と自分との差を感じずには居られなかった。何の苦勞も知らずにのうのうと日々を生きている自分のような人間に、被災した方々のためにできることなどあるだろうか？ 震災の後、故郷の地を復興させるために今もなお奮闘し続けている方々のために、いったい何ができるというのだろうか？

「知って下さい、私たちのことを」

思わず質問を投げかけてしまった私に、ある夫妻はそんな風に言った。あの日、この地に起こったことを、そして、故郷を復興させるため、あの日から歩み続けている自分たちの今の姿を、ただ知ってほしいと。それが何よりも、自分たちが歩むための力になるのだと。

東日本大震災から、もうすぐ五年の月日が経とうとしている。未だ震災の傷痕は癒えきらないものの、今の東北はもう瓦礫の山などではない。一度は粉々になった女川町の駅舎は2015年3月21日、新たに立派な木造建築で生まれ変わった。「形あるものは全て失っ

てしまった」と語っていた名取市の『ささ圭』という笹かまぼこ屋も、苦難の道乗り越えて2014年9月に新たな工場を竣工させている。徐々にだが、復興の兆しはあちこちで見え始めているのだ。

もしもこのレポートを読んでほんの少しでも興味が湧いてきた方が居たのなら、どうか今度のツアーで実際に足を運んでみてほしい。きっと東北の「今」が、あなたに知ってもらいのを待っている。